

本年度の重点に対する評価

本年度の重点	1	○資質能力の育成
目標(評価規準)	「主体的・対話的で深い学び」の視点から授業改善を図り、確かな学力の向上につなげる。	
重点に係る現状 設定理由	○小規模校化が進み、多様な考えを出し合い新たな解を作る場面を意図的、計画的に設定する必要がある。これを「強み」と捉え、全教職員が一人ひとりの児童の学習状況を多面的、多角的に把握しながら学力の三要素の定着、伸長を図る。 ○基幹学力が不足している児童が多い。丁寧に文字を書く、正しく計算をする、漢字の読み書きができるなど、基礎的な学力を確実に定着させたい。そのために、朝学習や放課後学習、家庭学習の充実を図っていく。 ○新設したグローバル表現科の推進を図り、郷土三崎を愛し多様な文化を大切にする国際感覚を身に付ける。 ○地域素材を教材化した問題解決的な学習を通して、思考力・判断力・表現力を高める。 ○指導と評価の一体化を意識することで、主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善を図る。	

評価資料	評 価
教職員アンケート結果 (具体的方策ごと)	・創造的な教育活動に関する設問(グローバル表現科・ICT教育) 多くの教職員が、前向きにとらえている。まだまだ試行錯誤の段階ではあるが、創造性を生かした教育活動を展開できた。 ・基礎学力の定着に関する設問 ほぼ全員が「あてはまる」と回答しているが、A評価は、半数程度だった。朝学習での取り組みに加え、授業の中でどう高められるかが課題である。 ・認め合い高め合い(協働的な学び)に関する設問 A評価が、半数以上。教職員が意識して取り組んでいる様子がうかがえる。 ・家庭学習の充実に関する設問 A評価が37.5%、B評価が37.5%、C評価が25%という結果だった。各自工夫して取り組んでいるが、まだまだ改良の余地があると判断している。
各アンケート等の結果	・「学校は、漢字や計算など基礎学力の定着に努めている」の設問には、84%の保護者が「あてはまる」と回答している。「よくあてはまる(36%)」「ややあてはまる(48%)」 ・「学校は、タブレットを活用するなどICT教育に積極的に取り組んでいる」の設問に、91%の保護者が「あてはまる」と回答している。「よくあてはまる(52%)」「ややあてはまる(39%)」 ・「学校は、量や内容など適切な家庭学習を実施している」の設問に、およそ7割の保護者が「あてはまる」と回答しているが、3割の保護者が「あてはまらない」としている。
自己評価結果 (見解と改善方策)	・ICT教育に積極的に取り組むことで、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に努めた。特に、AIドリルに関しては、各学年で工夫して取り組ませることで一人ひとりのニーズに応じた学びを展開することができた。 ・家庭学習の習慣化をめざし、宿題の量や質を工夫し継続して取り組めるように配慮した。また、高学年においては、必要に応じてタブレットを家庭に持ち帰り、家庭学習の一助とした。保護者アンケートでは、家庭学習の項目が、他項目に比べて評価が低い。保護者のニーズには応えきれていないことがうかがえるので、より良い家庭学習のあり方について、さらに研究を深めていく必要がある。 ・基礎学力を向上させるために、ドリルワークを中心に意図的、計画的に取り組ませた。朝学習や国語の時間にモジュール学習にも取り組み、一定の成果を上げている。ただし、まだまだ課題が多いので継続指導が必要である。
学校関係者評価結果	・学力向上に向け、学習規律の確立をめざしたことは評価できる。特に低学年から、基本的なことをしっかりと身につけさせてほしい。 ・家庭学習については、保護者の意識に差があるように感じられるので、継続して丁寧な情報発信に努めてほしい。
最終改善方策	・基礎学力の向上を基盤に、「主体的・対話的で深い学び」の視点から授業改善を図る。 ・グローバル表現科の質的向上をめざし、研究を推進する。 ・ICT教育を深化させ、個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実させていく。 ・家庭学習の充実に向け、具体的な方策を探っていく。

本年度の重点に対する評価

本年度の重点	2	○良好な人間関係の構築
目標(評価規準)	よりよい人間関係を築きながら、すべての児童が自分らしく、生き生きと活動している。	
重点に係る現状 設定理由	○基本的に相手を思いやれる優しい児童が多いが、コミュニケーション能力が未熟なため、すぐに怒鳴ってしまったり暴言を吐いてしまったりしてしまう児童もみられる。人とかかわりの中で「自分の大切さとともに、相手の大切さを認められる」人権感覚を養うことにより、さらに思いやりをもって他者と接することができる豊かな心の育成を図る。	

評価資料	評価
教職員アンケート結果 (具体的方策ごと)	・あいさつなど基本的な生活習慣の維持、規範意識の高揚に関する設問 A評価、50%、B評価、50%という結果だった。教職員が全員意識して取り組んでいる様子がうかがえる。 ・いじめ根絶に関する設問 A評価、75%、B評価、25%という結果だった。学校全体が同じ方向を向いて、よく努力している。さらに、継続的な取り組みが求められる。
各アンケート等の結果	・「学校は、子どもたちに寄り添いながら、深い信頼関係を構築するよう努めている」の設問には、96%の保護者が「あてはまる」と回答している。「よくあてはまる(57%)」「ややあてはまる(39%)」 ・「学校は、よりよい人間関係の構築やいじめの根絶のために授業や行事を工夫している」の設問に、94%の保護者が「あてはまる」と回答している。「よくあてはまる(48%)」「ややあてはまる(46%)」
自己評価結果 (見解と改善方策)	・毎週、子どもたちに「生活アンケート」を実施している。どんな事でもいいので、今悩んでいる事や困っている事、いじめに関する事などいつでも相談できる環境を整えている。特に困っていない子は、最近起きた楽しかった事やうれしかった事などを記すように促し、担任とのコミュニケーションツールにもなっている。また、スクリーニングシートなどを活用し、潜在的に困難を抱える子どもたちを把握するように努めた。 ・児童間のトラブル等については個人で対応せず、校長と教頭を含めた児童指導委員会で対応するようにした。細かい点も含めて、当該児童や関係児童に十分に話を聞き、保護者と共通理解を図りながら人間関係の構築に努めていく。 ・保護者との情報交換、共通理解を図り児童の倫理観の高揚を図っていく。 ・人権講演会、ピンクシャツデー、土曜参観で全学級人権教育(道徳)の授業を公開するなど、年間を通して人権教育を推進することができた。今後も、思いやりの心を育みつつ、小規模校の良さを強みとして、認め合い高め合いにつながる教育活動の推進を目指していく。
学校関係者評価結果	・大人の世界でも三人集まれば、いじめが起きる。いじめはあるという前提で指導しているのがとても良いと思う。 ・三崎地区で、犯罪が減ってきていると感じている。日頃からの地域の取り組みと学校教育の成果だと思う。様々な取り組みを継続していただきたい。
最終改善方策	・教育活動全体を通して人権教育を推進し、人権感覚豊かな子どもたちを育む。また、コミュニケーション能力を発揮し仲間と協働して課題解決するなど、自己肯定感を高める活動を継続して推進する。 ・小規模校ならではの強みを生かし、全教職員で全校一人ひとりを育てるという意識を大切に、組織的な児童指導を行う。 ・SCやSSWと連携し必要に応じて医療や福祉、警察といった外部機関とも連携する。

本年度の重点に対する評価

本年度の重点	3	○地域とともにある学校づくりの推進
目標(評価規準)	「地域教育力」の活用を図り、豊かな教育活動を推進する。	
重点に係る現状 設定理由	○グローバル表現科の目標にもある「郷土三崎を愛し」を中心に据えながら児童が主体的・探究的・協働的に課題解決に取り組める教育活動を推進していく。歴史と伝統のある三崎小学校、地域に愛されている三崎小学校であることを常に意識し、その期待に応えられるよう「三崎らしさ」を大切にしつつ、家庭・地域と協働した学校づくりを進める。また、学校の状況や本校の教育活動のねらいを積極的に情報提供し、家庭・地域・学校がともに連携して子どもたちを育む風土を醸成していく。	

評価資料	評 価
教職員アンケート結果 (具体的方策ごと)	・通信等で保護者に学級の様子を詳しく知らせているに関する設問 6割を超える教職員が、A評価。保護者のニーズによく応えていた。 ・授業参観等で家庭との情報共有、共通理解に努めているに関する設問 A評価が、5割。B評価が5割。学びの成果や課題について丁寧に情報提供していた。 ・地域の人材、素材を教材化に関する設問 9割の教職員が、あてはまると回答している。グローバル表現科の学習に地域を教材化したことがあげられる。
各アンケート等の結果	・「学校は、グローバル表現科を中心に創造的な教育活動を行っている」の設問に対して、7割の保護者が「よくあてはまる」と回答しており、「ややあてはまる」と合わせると、97%に達している。 ・「学校は、三小だよりなどで学校の様子を伝えるよう努めている」の設問には、99%の保護者が「あてはまる」と回答している。「よく(63%)」「やや(36%)」 ・「学校は、地域の人材や教育資源を積極的に教育活動に生かそうとしている」の設問には、95%の保護者が「あてはまる」と回答している。「よくあてはまる(63%)」「ややあてはまる(32%)」
自己評価結果 (見解と改善方策)	・グローバル表現科を本校教育活動の柱とし、「郷土三崎を愛し、多種多様な文化や考えを尊重する国際感覚豊かな児童の育成」というねらいを達成するため、教育実践を積み上げてきた。各学年が児童の実態に応じて創意工夫し、様々な実践に取り組む中で、地域の人材や教育資源を最大限に活用していく事ができた。ALTの母国であるオーストラリアの言語、文化交流だけでなく、年間を通して香港及び台湾の小学校と交流できたことは、異文化理解を深めることにつながった。 ・PTA運営委員会を中心とした保護者、地域の協力を教育活動に生かした。今後も継続して教育活動に関わる学校の考え方、教育活動の様子を発信し、地域に信頼される学校、地域に根差した学校づくりを目指していく。
学校関係者評価結果	・人と直接関わらうことを大切にしていることがわかり良かった。海外の方と直接触れ合うことで学ぶことはとても多いと思う。自然とグローバルな見方が育っていくと思う。地域や保護者にも少しずつ三小の活動が浸透してきているので、引き続き丁寧な情報提供をお願いしたい。
最終改善方策	・地域の教育資源を生かした教育活動を継続して推進していく。直接地域の人々と触れ合うことで、「郷土三崎を愛する気持ち」を実感を伴って育んでいく。 ・グローバル表現科や総合的な学習の時間等の学習成果を発表する学習発表会を年間計画に位置付け、見通しをもって取り組みを推進していく。学校行事などを公開し、地域・保護者へ学校の取り組みを積極的に発信する。地域に開かれた学校、地域に根差した学校づくりを継続して進めていく。